

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 添用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | | |
|---------------|----------------|----------|---|------|--------------|------------------|-------------------------|---------------------------------------|-----------|---------------------------------------|-----------------------------|------------------------|-----------------------------|-----------------|---|-----------------|---------------------------------|--------------------------------|--|--|--|
| | 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | | | |
| | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 適量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | | | |
| 歯痛・歯槽膿漏薬 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 殺菌成分 | イソプロピルメチルフェノール | フェノールを使用 | 本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。 | | | | | 頻度不明(過敏症) | | | ・損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現) | | | | ・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起こすことがある。 ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・炎症または異刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包装、ギプス包装、バッグに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。] ・誤飲を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。 | | 長期間に使用しないこと。(吸収され、中毒症状の発現のおそれ。) | | 効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) 排泄物の消毒:フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒疹疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍) | | |
| 塩化セチルピリジ | スプロールトローチ | | 口中で頻繁に遭遇する病原細菌である溶血性連鎖球菌や黄色ブドウ球菌またカンジダ等の真菌に対して、強力な殺菌作用を現す。 | | | | | 0.1%未満(口腔、咽頭の刺激感等) 5%以上又は頻度不明(過敏症) | | | | | | | | | | 1回1錠を1日3~4回かまずに口中で徐々に溶解して使用する。 | 咽頭炎、扁桃炎、口内炎 | | |

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 | | | |
|-----------------------|---|--|--|-----------------------------|--------------------------|---|-------------------------------------|-----------------------|---|---|---|-------------------------|--|---------------------------------|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | |
| | | 併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤 使用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | | |
| グルコン酸ク ロルヘキシジ ン | 医療用には 歯科用がなく、塩酸クロ ルヘキシジ ンのトロー チ・ダント ローチを使 用 | 抗菌剤の中 でも広範囲の 微生物に作 用する部類に 属し、特にブ ドウ球菌など のグラム陽性 球菌には、低 濃度でも迅速 な殺作用を示 す。一方、大 腸菌などのグ ラム陰性菌に も比較的低濃 度で作用する ことが知られ ているが、グ ラム陽性菌に くらべ感受性 に幅がみられ る。真菌類の多く にも感受性を しめすが、全 般的に細菌類 よりも抵抗性 がみられる。 | | | | 0.1～5%未満 (舌のしび れ、味覚異 常、口内炎、 黒舌症、胃部 不快感、胃部 膨満感、嘔 吐、下痢等) | 頻度不明 (過敏症) | | クロルヘキシジ ン に対する過敏症の 既往歴 | | 口腔内で唾液に より徐々に溶か しながら用いる (噛み砕いたり、 飲み込んだりし ない)(トローチと しての注意) | | 通常、1回1錠(塩酸クロル ヘキシジンとして5mg)を1 日3～5回、2時間ごとに投 与し、口中で徐々に溶解さ せる。 | 口内炎、抗菌 剤を含む口腔 創傷の感染予 防 |
| 殺菌成分 | クレオソート | 配合剤し かな なかつたため、 薬局方を用 いた | 本薬の防腐、 殺菌作用は フェノールに 劣るが、毒性 並びに刺激 作用は弱い。 粘膜、創傷面 などに対し、 初め刺激する が、後に知覚 麻痺を起こす | | | | | | | 大量使用で粘膜 の刺激、腐食、 更にめまい、昏 睡、けいれん | | | うか及び根管 の消毒、歯髓 炎の鎮痛・鎮 静。通常に 従ってうか及 び根管の処置 後、適量を滅 菌小綿球又は 綿繊維に浸潤 させてか管内 に挿入し、仮 封する。 | |
| | チモール | 保存剤とし てしかな なかつたため、 薬局方を用 いた | 本薬は他の 有機物が共 存しなければ フェノールや クレソールよ り殺菌力が強 い。健康な皮 膚、粘膜を腐 蝕せず、わず かに刺激によ り剥離を起す 程度である。 しかし、創傷 粘膜に対して はかなりの刺 激性を有する。 内服しても著 しく胃腸を刺 激すること がないから内 用剤としても 用いられる。 | | | 服用後、食道 や胃腔内に やけるような 感覚を引き 起こす。腸の ぜん動作用 を刺激して下 痢症状を起す。 | | | | | | | 局所の殺菌用 に液剤、軟膏 剤又は粉剤と して使用され ている。例えば、 チモール1%と サリチル酸3% を含むエタノ ール溶液、酸化 亜鉛やステア リン酸亜鉛を 含む1～2%の 軟膏、チモー ル2%、ホウ酸 35%を含むタル ク製剤などが 用いられる。そ の他本薬はう がいくすり、洗 浄料、歯みが き剤などに添 加して用いら れる。 | |

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | I 用法用量 | J 効能効果 | | |
|---------------|----------------------|--|---|-----------------|--------------------------|-----------------|--|----------------------------|-------------------------------|-----------------|--|---|--|---------------------------------|-----------------------|
| | | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | | | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | | | | | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化 につながるお それ |
| 評価の視点 | | 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | 用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | | | |
| ヒノキチオー ル | 配合剤のみ | | | | | | | | | | | | | | |
| フェノール | フェノール 薬料用では ない | 本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌、破 傷菌等)及び 大部分のウ イルスに対 する効果は期 待できない。 | | | | | 頻度不明(過 敏症) | | ・損傷皮膚及び粘 膜(吸収され中 毒症状発現) | | ・原液または濃 厚液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・眼に入らないよ うに注意すること ・本剤は必ず 希釈し、濃度 に注意して使用 すること。・炎症 または易刺激性 の部位に使用す る場合には、濃 度に注意して正 常の部位に使用 するよりも低濃 度とすることが望 ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、ギブ ス包装、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそれ があること。 ・使用しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。[吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。]・誤飲 を避けるため、保 管及び取扱いに は十分注意する こと。 | 長期間に使用 しないこと。 (吸収され、中 毒症状の発現の おそれ。) | 効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍率) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手荷室・病室・ 家具・器具、物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下気疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍) | | |
| 局所麻酔成分 | アミノ安息香 酸エチル | ヒソコカイン ・ゼリー | 神経終には 効果はないが 神経末梢部 において麻酔 作用があり、 粘膜および表 皮剥離部局 所の知覚を 麻痺する作用 がある。 本剤は塩化 ベンゼトニウ ムを含有し、 St.aureus FDA 209P、 E.coliおよび P.aeruginosa に対し抗菌力 を示した。 | | 中枢神経(振 動、痙攣) | ショック | 中枢神経(眠 気、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐) | 過敏症 | | | | | 歯科用以外に使用 しないこと。 使用量は必要最 少量にとどめること | 本剤を適量取り、局所に 塗布する。 | 歯科領域にお ける表面麻 酔。 |

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 | | |
|---------------|---|--|--------------|------------------|-----------------------------|---|---------------------------------------|----------------------------|--|--------------------------------|--------------------------|-------------------------|--|---|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化 | | | |
| | | 併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | 使用量に上 限があるもの | 適量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康破 害のおそれ | | |
| 局所 麻酔成分 | 塩酸ジブカイン ベルカミン 注、表面麻 酔類似と考 え使用 | 感覚・求心神経 繊維のNa ⁺ チャネルを遮 断することにより 局所麻酔作用を 発現する。効力、 持続性、毒性い ずれも最大級の 局所麻酔薬である が、より効力を強 めるために局所 鎮痛以外の目的 にはエビネフリン を添加して用い る | | 振戦、痙攣等 (頻度不明) | ショック(頻度 不明) | 頻度不明(眼 気、不安、興奮、 霧視、眩暈、悪心・ 嘔吐等) | 頻度不明(過 敏症) | 本剤に対し過敏症 の既往歴 | 本人又は両親、兄 弟に気管支喘息、 発疹、蕁麻疹等の アレルギー反応を 起こしやすい体質。 高齢者、妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人。 | | | | 使用に際し、目的濃度の 水性注射液または水性液 として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質 により適宜増減する。 仙骨麻酔0.05～0.1%注射 液にエビネフリンを添加し たものを用い、塩酸ジブ カインとして、通常成人10～ 30mgを使用する。 伝達麻酔(基準最高用量: 1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエ ビネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人3～40mgを 使用する。 浸潤麻酔(基準最高用量: 1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエ ビネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人1～40mgを 使用する。 表面麻酔 -耳鼻咽喉科領域の粘膜 麻酔には、1～2%液にエ ビネフリンを添加したもの を用い、噴霧または塗布 する。 -眼科領域の麻酔には、 0.05～0.1%液にエビネフ リンを添加したものを用い、 通常成人には1～5滴を点 眼する。 -尿道粘膜麻酔には、 0.1%液にエビネフリンを添 加したものを用い、塩酸ジ ブカインとして、通常成人 男子10～20mg、女子3～ 7mg -膀胱粘膜麻酔には、 0.025～0.05%液にエビ ネフリンを添加したものを用 い、塩酸ジブカインとして、 通常成人10～20mg -筋所鎮痛には、0.025～ 0.05%液を用い、適量を使 用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエビネフ リンを添加したものを用い、 伝達麻酔・浸潤麻酔には 塩酸ジブカインとして、通 常成人1～2mg | 仙骨麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔・浸潤麻 酔 |

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 | |
|---------------|--|---|---|---|---------------|---------------------------------------|-------------------------------------|--|---|------------------------------|--|--|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ) 併用注意 | 重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上 限があるもの 過量使用・誤使 用のおそれ 長期使用に よる健康被 害のおそれ | スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| 炎症成分 | グリチルリチン酸二カリウム 歯痛・歯槽膿漏薬がなかったため、点眼薬の添付文書を使用 | 抗アレルギー作用、角膜上皮再生促進作用を有する | | 頻度不明(眼の刺激感) 頻度不明(過敏症) | | | | | 点眼用のみ使用(点眼としての注意) | | 通常、1回2～3滴を1日5～6回点眼する。なお、症状により適宜増減する。 | アレルギー性結膜炎 |
| | グリチルリチン酸 歯痛・歯槽膿漏薬がなかったため、点眼薬の添付文書を使用 | グリチルリチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルリチン酸の化学構造がハイドロコルチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。 | | 5%以上又は頻度不明(過敏症) | | | | | 眼科用として使用しない(軟膏としての注意) | | 通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。 | 湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎 |
| 組織修復成分 | カルバソクロム | 内服の配合剤のみしかなかった | | | | | | | | | | |
| 止血成分 | カルバソクロム | アドナ(AC-17)錠(10mg) / アドナ(AC-17)錠 30mg / アドナ(AC-17)散 10% カルバソクロムがなかったためカルバソクロムスルホン酸ナトリウム製剤の添付文書を使用 | 細血管に作用して、血管透過性亢進を抑制し、血管抵抗値を増強する。血液凝固・線溶系に影響を与えないことなく出血時間を短縮し、止血作用を示す。血管透過性抑制作用、細血管抵抗値増強作用、出血時間短縮作用、血小板・血液凝固系に対する作用、呼吸系・循環系に対する作用を有する。 | 0.1～5%末満(食欲不振、胃部不快感) 0.1%末満(悪心、嘔吐) 頻度不明(過敏症) | | | 本剤の成分に対し過敏症の既往歴、高齢者 | | | | カルバソクロムスルホン酸ナトリウムとして、通常成人1日30～90mgを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。 | 毛細血管抵抗性の減弱及び透過性の亢進による出血傾向(例えば紫斑病等) 毛細血管抵抗性の減弱による皮膚あるいは粘膜及び内臓からの出血、眼底出血・腎出血・子宮出血 毛細血管抵抗性の減弱による手術中・術後の異常出血 |
| 内服歯槽膿漏薬 | | | | | | | | | | | | |

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 | | | | |
|---------------|-------------------|---|--|-------------------------|--------------------------|--|---|-----------------------|---|-----------------|--------------------------|-------------------------|--|---|--|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化 | | | | |
| | | 併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生 するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被害 のおそれ | | | |
| 抗炎症成分 | 塩化リゾチーム レフトーゼ錠 | 抗炎症作用: 瘰癧形成・組織 修復作用: 膿粘液の分解と 排出作用: 出血抑制作用 | | | | ショック、アナ フィラキシー 様症状・SJS症 候群・Lyell 症候群(頻度 不明) | 0.1~5%未満 (下痢、胃部 不快感、悪 心・嘔吐、食 欲不振)、 0.1%未満(口 内炎等)、頻 度不明(肝機 能障害 (AST(GOT)、 ALT(GPT)、 Al-P、γ-GTP、 LDHの上昇等、めま い) | 0.1%未満(過 敏症) | | | | | 作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明ら かにされてい ないので、漫 然と投与しない。 | 1.慢性副鼻腔炎の腫脹の 緩解、痰の切れが悪く、喀 出回数が多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰咳出困難、小 手術時の術中術後出血の 場合、通常、成人は1日塩化 リゾチームとして、60~ 270mg(力価)を3回に分けて 経口投与する。2.歯槽膿 漏症(炎症型)腫脹の緩解 の場合、通常、成人は1日 塩化リゾチームとして、180 ~270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。高齢 者減量 | 1.慢性副鼻腔 炎の腫脹の緩解、 痰の切れが悪く、 喀出回数が多い 気管支炎、気管 支喘息、気管支 拡張症の喀痰咳 出困難、小手術 時の術中術後出 血(歯科、泌尿器 科領域)の場合 2.歯槽膿漏症 (炎症型)腫脹の 緩解の場合 |
| 組織修復成分 | 綱クロロフィ リンナトリウム | 内服の配合 剤のみしな なかった | | | | | | | | | | | | | |
| 止血成分 | カルバソク ロム | アドナ(AC- 17)錠(10mg) /アドナ (AC-17)錠 30mg/アド ナ(AC-17) 散10% カルバソク ロムがな かったので カルバソク ロムスルホ ン製剤の添 付文書を使用 | 細血管に作用 して、血管 透過性亢進 を抑制し、血 管抵抗値を 増強する。血 液凝固・線溶 系に影響を 与えることなく 出血時間を短 縮し、止血作 用を示す。血 管透過性 抑制作用、 細血管抵抗 値増強作用 、出血時間短 縮作用、血 小板・血液凝 固系に対する 作用、呼吸 系・循環系に 対する作用を 有する。 | | | 0.1~5%未満 (食欲不振、 胃部不快感) 0.1%未満(悪 心、嘔吐) | 頻度不明(過 敏症) | | | | | | カルバソクロムスルホ ンナトリウムとして、通常成 人1日30~90mgを3回に分 割経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。 高齢者では減量。 | 毛細血管抵抗 性の減弱及び 透過性の亢進 によると考えら れる出血傾向 (例えば紫斑病 等) 毛細血管抵抗 性の減弱による 皮膚あるいは 粘膜及び内 臓からの出 血、眼底出血・ 腎出血・子宮 出血 毛細血管抵抗 性の減弱による 手術中・術後 の異常出血 | |

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | | | |
|----------------|--------------|--|--------------|-------------------------|------------------|---------------------------------------|-----------------------------|-----------------|-----------------------------|---------------|------------------|--|---|---|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | |
| | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | |
| ビタミンC(アスコルビン酸) | アスコルビン酸「ヨシダ」 | アスコルビン酸(ビタミンC)が欠乏すると、壊血病や小児ではメルレル・バロー病を生じ、一般に出血傾向の増大、骨・歯牙の発育遅延、抗体産生能や創傷治癒能の低下などを起こす。コラーゲン生成への関与、毛細血管抵抗性の増強や血液凝固時間短縮などによる出血傾向の改善、副腎皮質機能への関与(ストレス反応の防止)、メラニン色素生成の抑制などが報告されている。 | | | | 頻度不明(悪心・嘔吐・下痢等) | 高齢者 | | | | | 下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合(毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑、炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎)には効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。 | 通常成人1日50~2,000mgを1~数回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。 | 1.ビタミンC欠乏症の予防および治療(壊血病、メルレル・バロー病)、ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体労働時など)。 2.下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。 毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑、炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎。 なお、2.の効能・効果に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。 |

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | | | |
|---------------------|---|---|--------------------------------|-------------------------------|------------------|--|-------------------------|-----------------|-----------------------------|---------------|--|-----------------|--|---|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | |
| | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | |
| フィットナジオン | カチーフN錠(5mg錠)／カチーフN錠(10mg錠)／カチーフN散10mg/g | ビタミンKは血液凝固機能に關与して、血液凝固機能を正常に維持する。 | クマリン系抗凝血薬(ワルファリン)(ワルファリンの作用減弱) | | | 類薬(メナジオン)により、高ビリルビン血症(大量・長期投与)頻度不明(悪心、嘔吐、軟便) | | | 妊娠末期(大量投与) | | 大量・長期投与で高ビリルビン血症(類薬-メナジオン) ・妊娠末期の婦人には大量投与を避けること。 (類薬-メナジオンで、新生児等に高ビリルビン血症) | | フィットナジオンとして、通常成人1日5～15mg、新生児出血の予防には母体に対し10mg、薬剤投与中における低プロトロンビン血症、胆道及び胃腸障害に伴うビタミンKの吸収障害、肝障害に伴う低プロトロンビン血症には20～50mgを分割経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。 | ビタミンK欠乏症の予防及び治療 各種薬剤(クマリン系抗凝血薬、サリチル酸、抗生物質等)投与中における低プロトロンビン血症 胆道及び胃腸障害に伴うビタミンKの吸収障害 新生児の低プロトロンビン血症 肝障害に伴う低プロトロンビン血症 ビタミンK欠乏が推定される出血 |
| ビタミン成分 酢酸トコフェロール | ビタミンE剤:ユベラ錠 | 微小循環系の賦活作用を有し、末梢血行を促す。膜安定化作用を有し、血管壁の透過性や血管抵抗性を改善する。抗酸化作用を有し、過酸化脂質の生成を抑制する。内分泌系の賦活作用を有し、内分泌の失調を是正する。 | | 0.1～5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢) | 0.1%未満(過敏症) | | | | | | 末梢循環障害や過酸化脂質の増加防止の効能に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきではない。 | | 錠剤 通常、成人には1回1～2錠(酢酸トコフェロールとして、50～100mg)を、1日2～3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 1. ビタミンE欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行症、動脈硬化症、静脈血栓症、血栓性静脈炎、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症) 3. 過酸化脂質の増加防止 |

禁煙補助剤

製品群No. 77

ワークシートNo.47

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | |
|---------------|--------|----------|-----------------------------------|------|---|------------------|-------------------------|---|-----------|---------------------------------------|--|---|---------------------------------|--|--------------|--|--|------|--|--|
| | 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | | |
| | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | | |
| 禁煙補助薬 | ニコチン | ニコチネルTTS | タバコに含まれるニコチンを経皮的に吸収させ、禁煙時の離脱症状を軽減 | | アドレナリン遮断薬(アドレナリン遮断性の減弱)、アドレナリン作動薬(アドレナリン作動性の増強)、禁煙開始後(フェナセチン・カフェイン・テオフィリン・イミプラミン・ベンタゾシン・フロセミド・プロプラノロールの作用の増強) | | | 5%以上(一次刺激性の接触皮膚炎(パッチのため)、不眠)、0.1~5%未満(皮膚剥離・色素沈着(パッチのため)、頭痛、めまい、倦怠感、異夢、悪夢、集中困難、嘔吐、腹痛、口内炎、下痢、食欲不振、ALT、LDH、γ-GTP、総ビリルビンの上昇)、0.1%未満(疲労、しびれ、眠気、易刺激性、胸焼け、AST上昇) | | | 非喫煙者、妊婦・授乳婦、不安定狭心症・急性期の心筋梗塞・重篤な不整脈・経皮的冠動脈形成術直後・冠動脈バイパス術直後、脳血管障害、本剤成分過敏症 既往歴 | 心筋梗塞・狭心症 既往歴、狭心症で症状が安定している、高血圧、不整脈、脳血管障害、心不全、末梢血管障害、甲状腺機能亢進症、褐色細胞腫、糖尿病、消化性潰瘍、肝・腎機能障害、アトピー性皮膚炎・湿疹性皮膚炎(パッチとしての注意)、てんかん又は既往歴、神経筋接合部疾患又はその既往歴、高齢者、 | | 禁煙の意志が強く、循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、泌尿器疾患、代謝性疾患等の基礎疾患を持つ患者であって、禁煙の困難な喫煙者にしようすること。 | | 過量投与で急性ニコチン中毒症状、禁煙指導を実施。本剤使用中は喫煙により循環器系等への影響が増強されるので、喫煙させない。 | 類薬の長期使用によりニコチン依存性が製剤に引き継がれ離脱が困難になる症例が報告。10週間を超えて投与しない。 | | ニコチネルTTS10(ニコチンとして17.5mg含有)、ニコチネルTTS20(ニコチンとして35mg含有)又はニコチネルTTS30(ニコチンとして52.5mg含有)を1日1回1枚、24時間貼付する。通常、最初の4週間はニコチネルTTS30から貼付し、次の2週間はニコチネルTTS20を貼付し、最後の2週間はニコチネルTTS10を貼付する。なお、最初の4週間に減量の必要が生じた場合には、ニコチネルTTS20を貼付する。本剤は10週間を超えて継続投与しないこと。 | 循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、代謝性疾患等の基礎疾患を持ち、医師により禁煙が必要と診断された禁煙意志の強い喫煙者が、医師の指導の下に行う禁煙の補助 |